

長春の理容店

今日は近所の理容店に行きました。

理容店はあちこちにあり、規模は大小さまざまで、外から中が見られるようガラス張りのつくりになっています。店内には雑誌が置かれ、椅子の配置等、日本のものとさほど違いはないのですが、店員の数は明らかに違います。今日行った小さな店でさえ 10 代、20 代の若い人ばかり 8 人もいました。

中に入るとまず洗面台に通され、髪を洗います。その後理容師が髪を切るわけですが、この間、他の店員は特に何もしておらず椅子に座って外を眺めていたり、私の髪が切られていくのをじっと見ています。すぐ側で数人から見られていると思うとなんだか落ち着きません。。

これまで思うような髪型になったためしがなく、いろいろと店をかえてきました。

一般にはさみを横に使い単に短くすることは問題ないのですが、はさみを縦に入れ梳く技術がありません。梳くことができないので結果として頻繁に足を運ぶこととなり、日本ではおよそ 1 ヶ月半に一度の間隔で行くところ、こちらでは 3,4 週間に 1 度です。

これは誰でも簡単に理容業務に携わることができることと、理容料金に関係しています。一般の理容料金は 10 元（150 円程度）から 15 元程度、大学構内の床屋だと 5 元とさらに安くなります。時間にして 30 分程度です。

大学の食堂でとる一食分の値段とほぼ同じ価格で散髪ができるのは、理容という技術がほとんど評価されていないからです。

理容という技術の評価した価格体系があって技術が向上するのか、技術が向上した後に技術の評価した適正な価格となるのかはわかりませんが、長春では髪型、服装に気を配る人が随分と増えているので、今後、理容 / 美容業界は大きく発展が期待される分野だと思います。

理容店の店員の数もそうなのですが、スーパー、市場等での接客員の数も業務量のわりに非常に多いことに気づきます。接客員が暇そうに肘をついて机によりかかっていたり、接客員同士でおしゃべりをしていたりと、日本人の感覚からするととても非効率でよくやっていけるなあと思う店も結構ありますが、必要以上に多くみえる接客員の数でもうまく機能しているのは、やはり今のこの社会状況に合っているからこそでしょう。

13 億の人口を抱える中国ですから、就業率の増加はとても重要です。接客員の収入は低いものの社会と接点をもつことで心身の安定がはかられ、ひいては社会の治安にもよい影響を及ぼしています。

日ごろ、私たちが口にする効率 / 非効率ということばは経済上の観点からのもので、非効率だと感じた私はやはり日本人なのだなあと思いました。

時には効率ということばを忘れてみることも大切なように思います。

（吉林省派遣 竹中和彦）